

運動プログラム創作活動に関する一考察

伊東 光一（200511774、体操方法論）

指導教員：長谷川 聖修、遠藤 卓郎、本谷 聡

キーワード： 運動嫌い、遊び、競技スポーツ

【目的】

筆者は、学校教育において、ただノルマをこなすだけの授業に疑問を感じてきた。中でも、体育の授業において、決められた動きをするように強制される雰囲気には馴染めず、意欲的に活動することが出来なかった。

そこで体育専門学生を対象として、意欲を持って取り組める運動プログラムを創作させ、この活動の様子をビデオカメラで記録するとともに内省調査を行うことで、運動プログラム創作活動の実態について基礎的な知見を得ることを目的とする。

【方法】

T 大学体育専門学生139名（5クラス）を対象として、各1回の調査を実施した。学生を6名から7名にグループ分けし、T 大学総合体育館3階体操場にある用具を自由に使用して、運動プログラムを創作させた。そのとき以下の三つを条件とした、

- I) 用具の持つ特性を活かす（組み合わせ可）
- II) 簡単なものから段階的にレベルアップ
- III) 運動嫌いな子もチャレンジしてみたいくなる

また、授業終了時、学生に質問紙への記入をさせた。



写真1 空中ブランコで遊ぶ学生

【結果】

1) 創作活動における条件の「難しさ」について
創作時における3条件の中で「運動の嫌いな子もチャレンジしてみたいくなる楽しさの条件」が特に難しい傾向を示した。

2) 創作活動時の内省調査について

「主体的に取り組めた」、「興味を持てた」、「協

力出来た」の三つの項目とも肯定的な傾向が明らかになった。

3) 創作した運動プログラムに対する評価について

「用具の持つ特性を活かす」「段階的にレベルアップ」の項目に対して「そう思う」「とてもそう思う」との回答は約90%に及び、「運動の嫌いな子もチャレンジしてみたいくなる」、「あなたが指導者になった時、このプログラムを指導したい」の項目に対しては70%に及んだ。

【考察と結論】

本来、運動やスポーツが好きな学生である体育専門学生にとって、運動嫌いな子に配慮するという課題は難しい条件であると考えられる。そのことは、今回の質問紙調査の結果から、本実験における調査対象の多くが他の条件と比較して「運動嫌いな子」に共感することが難しい傾向を示したことからも明らかになった。

一方で、本実験におけるプログラムのような、学生の自由な発想によって運動を創作する活動を、69%にも及ぶ学生が今後指導したいと回答したことは、体育の授業が好きであったはずの体育専門学生においても、競技スポーツばかり行う学校体育に少なからず疑問を持っていることを示したといえる。

これらのことから、本研究が体育専門学生自身に運動が苦手な子を想定して運動プログラムを創作させる試みは、確かに難しい課題ではあるが、将来指導者となる学生にとって意義あることであると思われる。



写真2 棒とボールで遊ぶ学生